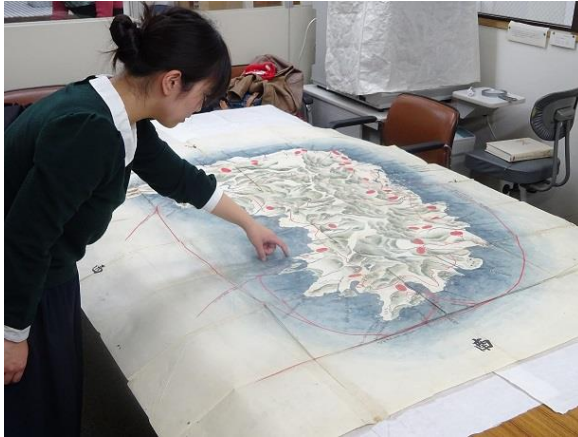


熊本大学日本史研究室資料保全継承会議・安高啓明研究室

長崎・熊本両県における自然災害（地震・噴火・津波）に関する 総合調査

調査研究期間：平成29年11月1日（水）～平成30年5月31日（木）



【調査研究の内容・目的】

- 平成28年に発生した熊本地震を教訓に、江戸時代に熊本地方で起った震災の歴史資料や民俗資料を調査し、次世代へその実態を伝えていく。また、地域に埋もれた史資料の発掘に努め、資料の保全を訴えていく。
- 歴史学の調査手法に基づき、古文書や供養塔などの関係資料の調査、古文書や碑文の解読を通じて、当時の状況を正確に記録していく。被災した人たちのリアルな息遣いや、復興のために行政がとった政策などを詳らかにしていくことを目指していく。
- 過去に起こった出来事を教訓として伝え、特に海に囲まれた九州にある県として、地震と津波による被災状況を正確に記録する。海洋教育の一環として、寛政4年の地震と津波をとらえて、情報発信していく。

1. 調査研究内容の詳細

【調査研究代表者】

■安高啓明（熊本大学大学院人文社会科学研究部 准教授）

【調査研究分担者】

- 松本博幸（天草市文化財課 参事（学芸員））
- 吉田信也（島原市教育委員会・主査（学芸員））
- 島由季（大浦天主堂キリシタン博物館学芸員）
- 久保春香（熊本大学大学院生）
- 長屋佳歩（熊本大学大学院）
- 川端駆（熊本大学3年生）

【実施計画】

- 2カ年計画1年目

【主な調査研究対象など】

- 古文書調査
- 絵図面調査
- 供養塔調査



本年度の古文書調査は、島原図書館松平文庫（島原市）、長崎歴史文化博物館（長崎市）、熊本大学図書館（熊本市）、国立公文書館（東京都千代田区）に所蔵されている資料を対象とした。雲仙の眉山の崩落に関する記事や、その後の対応、津波被害前後の島原城下の状況がわかる絵図などを選び出し、その実見、解読を行なっていった。

この調査により、地震にともなって行われた藩の対応として、海側に避難し、船などに物資を輸送していることが明らかとなり、当初、津波を想定していなかった人々の動きがわかった。また、これにともない、住民移動を積極的に行っており、城下から離れた周辺地域への受け入れをしてもらい、雲仙岳より北方に避難させている。また、絵図により、津波被害が島原城下のどのあたりまで及んでいるのかが明らかとなり、今日の状況と置き換え、その範囲を特定することができた。

このように、歴史資料に基づき被害状況の特定していき、どのような避難指示がなされ、難を逃れることができたのかを詳らかにすることができた。



本年度は、津波被害で亡くなった人たちを供養して建立された「津波供養塔」の現状調査と碑文の解読を島原半島を対象に行なっていった。島原半島の沿岸部に建てられた供養塔は、今日の区画整理などの影響もあり、従来の場所から移転されている供養塔もあった。また、風化しているものも散見されたため、碑文の解読などは、重要な作業となった。

この供養塔の調査を通じて、当時の人たちにとって、津波被害がどのように受け止められたのか。死と対峙しながら、生き延びることができた人たちがとった行動様式が明らかとなった。そして、海の恩恵を受けながら生活していた人たちのなかで芽生えた感情を、こうした碑文から読み解くことができた。

2. 本調査研究成果を基に計画・実施可能な 「海の学び」に繋がる博物館活動案

■博物館活動の形態：「島原大変肥後迷惑」の記録と記憶

■実施時期：平成30年5月26日～7月16日

■実施場所：熊本大学附属図書館

【実施内容】

■調査してきた島原図書館松平文庫所蔵資料を展示し、古文書から読み解ける「海の学び」の立場にたった災害の実態を紹介する。

■島原大変での死没者を供養するために建立された碑の写真パネルを作成し、これを通じて解説、現地へ訪れる際の参考にしてもらう。

■効果的かつ広域に発信する媒体となる、海洋教育を視野に入れた解説シートを作成する。

■一連の作業に大学院生や学部生を参加させ、将来、博物館学芸員として就業する際の参考となる実践教育を展開する。

【他の博物館・機関や地域社会との連携や取り組み内容】

■申請団体は、天草市立天草キリシタン館でサテライト展示のブースを持っている。そこで天草側の被害状況などを伝える展示を行なう。

■熊本県内に県立・市立・財団含めて博物館施設があるため、これらを会場にした企画展へ発展することも期待できる。

■歴史愛好家などが集まるグループが県内にはいくつかあり、ここに参加している人たちに、本事業を紹介するとともに、成果を提示する。そこから本団体と協働体制が築けることが期待できる。

【特に学校教育との連携について】

■熊本大学の付属学校、島原市内や天草市内の小中学校など、総合学習等の時間で本テーマを取り上げてもらい、必要に応じて講師派遣を行なう。

■大学生で学芸員課程を履修している学生に、海洋教育の視点をもたせる教育を行なっていく。学部教育と課程教育の横断的な実践教育を行なっていく。

【事業全体のまとめ】

- ・調査をしてきて、海の恵みを受けながら生活してきた沿岸部の人たちは、災害と隣あわせで、畏怖を抱きながら日常生活を送っていたことがわかった。
- ・行政である藩庁も経験則から避難誘導をしていたが、山体崩落という想定外の出来事に対して、迅速に対応しようとしていたことがわかった。
- ・あわせて、死没者を悼む気持ちは地域社会のなかで芽生えており、日常生活とは切り離れた民衆思想のなかで祀られていた。
- ・こうした海と人、生活と災害という両者の緊張関係が潜在的に存在していたが、これは現在にも共通する普遍的な概念だったことを海の学びのなかに位置付けることができた。
- ・調査にあたった供養塔のなかには、損耗が激しいものや風化が進んでいるものもあった。法量を計測し、碑文の解読にはあたったが、それ以上の措置をとれなかった。今後は拓本等の作業なども考慮に入れながら、調査を行なう必要がある。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 島原市教育委員会	資料調査および資料借用
2.	
3.	
4.	
5.	

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 安高啓明『トピックで読み解く日本近世史』（昭和堂）	2018年4月20日
2.	
3.	
4.	
5.	

以上